

村松祐次著「中國經濟の社會態制」

増淵龍夫

91

こゝ百年來、アジア諸國は、ひとしく、その近代化の課題を背負つて、苦難の道を歩んで來てゐる。表面はなやかな近代の制度文物の整備にも似ず、その現實の過程を變視する者にとつては、そこでの實現を希求されてゐる近代化への過程は、それぞれの國のもつ傳統的な基調に制約されて、混亂と低迷のうち、それぞれに各々異つた固有な姿をとつて押しすすめられて行く様に見える。もとより、人類文化の一樣な進展と云ふ觀念が、何らの但書もなく信奉される場合は、その様な問題はほとんど無意味な呻吟にすぎぬと見られるであらう。それは、各民族の生活秩序や文化は、それが一樣な發展階程のどの階程に位してゐるであらうか、をたづねる角度から問題にせられるに過ぎないからである。然しながら、到達せらるべき希求の點よりも、むしろそこへの現實の過程そのものにより本質的な問題を感ずる者にとつては、この混亂せる現實の過程を正しく理解し、その希求にかけて、その低迷が何に由來するかを明らかにすることが、何よりも先づ切實な關心事となる。そして、そのためには、先づ、

それらの國のもつ傳統的基調が、その固有な生活秩序が、世界的規模において、正しく問はれねばならない。今日、中國を襲ふてゐるはげしい政治的命運は、かゝる意味において、もつともするどく問題を提出してゐるかに見える。中國社會の傳統的基調、人はそれを「中國社會の停滞性」として特徴付けて來てゐるのであるが、その構造と特質を、正しく把握することは、中國の政治的命運の歸趨にかけて、今日程切實な問題として要請されてゐることはない。村松祐次氏の近著「中國經濟の社會態制」は、正にこの問題に正面からとりくみ、すぐれて統一的な關聯から、この課題に答へんとするものである。

二

何よりも先づ、著者は阿片戰爭以降こゝ百年來の中國をば、政治的面の目まぐるしい變化と、經濟社會での停滞的傾向とのコントラストにおいてとらへ、現在中國において進行してゐるはげしい政治的局面的變動をば、社會經濟の變化の過程として把へる今日通用の一般の見解に對してきはめて懷疑的な立場に立つ。そしてこの著者の立場をさへえるものが、著者の理解する「中國經濟の社會態制」であり、本書の全體をあげて、その具體的構造と固有な性格を説明せんとする。ところで、その様な「態制」をとらへんとする場合、何よりも特徴的なことは、素材たる諸々の機構や制度をば、普遍化の契機を内にむくる概念化的方法によつて把へることをせず、それをば個々の經濟主

體の行爲關係と見、かゝる行爲を裏付ける個々の主體の固有な中國の「心情」との關聯において、その統一の個性把握を意圖するのである。従つて、こゝでは、かゝる「態制」の因果的發生的解明は問題とはならない。すでにあるものとして前提された「態制」の内面化によるその個性把握と而もその類型化が、著者の主要關心であるかの如くである（第一章）。このことは本書全體の理解にとつて更に吟味されねばならない重要な問題であるから、後に再び觸れることにする。

さて、著者は、中國經濟の社會態制の特質をば、次の二つの素材的側面から具體的にとらへんとする、その一は一定期間いとなまれた經濟行爲の結果的集計としての經濟事象の量的な外貌、その比重及び構成關係を通じて（第二章）、第二には個々の經濟主體間の社會的な關係を通じてである（第三、四章）。先づ、第一の側面を通じて、農業的、そして消費財中心の生産構造、高い農業人口密度とその當然の結果である、零細な主穀農法と低い一人當りの年實質所得、そしてその様な中國經濟の傳統的外貌は、相互に規定し合ふことによつて、總量としては巨大な中國經濟の循環が、結局家族員數五乃至六人の家計單位毎に行はれる家内經濟的循環の總計として成立する發展のない停滞性、その基底にもつものであることが指摘される。そこでは、零細農經營をいとなむ農民と、家内生産者・手工業者の地位が、經濟的にはすこぶる強靱な競争力を持ち、個別的には不安定ではあるが、社會態制的には極めて高い安定度

をもつものとして理解され、そこで指摘される近代の工場制工業の未發達は、それを外國資本の壓迫や、官人の收奪による蓄積資本の缺乏等の外部的要因に歸せしめる一般の見解を排して、何よりも先づ、内部的に、以上の如き態制的外貌をさへる同一の經濟條件と、より本質的にはそれを裏付ける固有な「經濟心情」との關聯において説明される。すなはち、それは機械を驅逐する低廉な過剩勞働力とそれに比していちぢるしく高い地代と金利に、そして後者は家計的「殖資本的な經濟心情」に關聯せしめらる。そして外國資本の侵入は、「外國貿易と國際收支」の分析によつて、以上の如き安定度の高い零細經營の生産構造よりなる中國經濟態制に決定的影響力を持ち得ないものなることを示さうとする（第二章）。

以上の様な中國經濟態制の外貌と相互規定關係にある、第二の側面、中國經濟の社會的、制度的關係は、個々の經濟主體を互に結合する規制の態制と、その様な包括的態制の中で形成せられる經濟的行爲の内部組織との二つの側面から追求せられる。第一の規制のそれとしては、先づはじめに、この國の政府、官僚と經濟との關係が、財政形態、貨幣制度、及び金融制度の具體的關係の分析を通じて解明の對象となる。そこでは、北京政府以來の財政收支の分析を通じて、地方より浮き上つた權威のない中央政府がその存立の基礎を私的武力に求め、同時に私經濟の意味における債務者として契約的信義履行を怠らない、中央政府のすぐれて私人的な性格が指摘される。貨幣制度

においては、その雜種幣制に對し政府の占める地位のきはめて消極なこと、公共的立場よりする統一としてではなく、私人的立場からする資金造出のための通貨發行權の掌握と利用、その結果として雜種幣制の單なる錯雜化、金融制度においても、政府は寛大な高利を支拂ふ借手であるが、インフレーションを強行する攪亂者であるかを出ない關係、等々が、何よりも中央政府、官僚の私人的性格を明示するものとして指摘され、政府の經濟に對する關係は規制でなく放任、公共的立場の自覺でなく、私人的な契約信義の遵守として示される。同様の傾向は中央だけでなく末端の縣政府の行動についても明示せられ、縣長の私會計と縣政府の公會計の未分化、徵稅末端機構の私經營化、徵稅以外には官民間のきはめて無關心的放任的關係がへそこでも指摘される。以上の如きこの國の政府の規制の態制をば、それを構成する個々の官僚の私人的・個別的性情と、かゝるものとして期待する一般個人人の同じく個別的心情との關聯において明らかにした後、著者は次いで、この様な政府の下に放任せられた一般農民、市場人の自律の基礎を追求する。すなはち、村、宗族、ギルド等の中間的な諸團體が、第二の規制態制として、解明の對象となる。そこでも、著者は、それらをもつて、傳統的、封鎖的な協同體の性格をもつものとする通説をしりぞけて、これら諸團體のいぢぢるしく個別主義的な性格を主張する。そこでは身分的秩序の缺除、全體として、成員の經濟行爲を規制する様な傳統的權威の缺除が指摘され、原理的には、孤

立的な個々の成員の個別的利益を守るために最低限度必要な範圍だけに制限された、その限りでのゆるやかな一種の支配の態制があるのみとする。そして、かゝる支配、すなはち、村の會長、ギルドの董事等の立場を個々の成員に對してさへえるものは、一方から云へば力(財力・才幹)、他方から云へば、個々の成員の個別的立場(面子)の尊重、特に契約的信義の維持、溫情、及びその反映たる聲望であり、從つて、村の場合でもギルドの場合でも、その支配者の個々の成員に對する關係は私人的であり、又そのかぎりにおいてであつて、この國の政府が經濟に對してとる關係と、著しく似通つた性格のものとして、理解される。この様な政府と、この様な村、ギルドの固有な態制から、こゝに市場秩序、經濟行爲の固有な中國形態が相照應するものとして解明される。すなはち、一方では、その個別主義的傾向よりする、徹底した自由競争の形、而も他方では、逆にその傾向が絶えず狹隘な私人的保證の範圍に制約され、ここでは、市場活動が絶えず狹隘な私人的保證の範圍に制約され、私人的關係を辿つてなれば行はれないと云ふ形をとる。ここに中國の市場秩序が無數の仲介商人の私的保證の連鎖によつて支へられる所以があり、そこから、當然結果される予測の困難な、可計量の小さな市場情況の下で、その經營活動における一方では冒險的、投機的、他方では孤立的な家計的・自衛的な傾向が同一心情の二つの側面として結合し、極端に利潤追求的、貨幣計算的でありながら、獲得された利潤が、自家需要的な消費的なものとして考へられ、生産擴大のための資本として考へ

なられない、經濟に對する中國の心情として表はれる、と解明される(第三章)。

問題をかゝる經濟主體の内部組織にうつして考へて見ても、同一傾向が認められるとして、著者は第三の内部態制の考察にうつる。そこでは、農業經營の組織として、地主、自作農、小作農民の土地關係が、商工業經營の組織として、合股と問屋制生産組織及び會社經營が、考察の對象となる、そして、いづれの場合でも、經營の組織は出来るだけ小さな個人支配と個人保證の可能な規模の零細單位に分裂せられてゐることが何よりも特徴として指摘される。そして稍々大きな、地主の土地經營や會社企業の如く、個人的支配力で統率しきれない規模の組織は、その様な小さな組織單位の連結、即ち影響力ある個人の仲介又は請負を通じて、多元的重層的に構成せられる關係が明らかにせられ、大土地所有に見られる定額請負の小作料徴收者の重層、工場や鑛山における包工頭—工人制の普及はその具體的表現であり、そしてそれが、何よりも大きな經營組織の生産効率のいぢるしい低下をもたらす原因として擧げられる(第四章)。

かくの如くにして以上の如き三つの側面からみられる態制が相互に規定し合ふことによつて、個別的には不安定ではあるが、構造としてはきはめて安定した發展のない停滞的社會經濟を生み、そしてそれらの態制をさゝえてゐるものが、個々の經濟主體の中國固有な心情であると、著者は見るのである。従つて著者の理解した「心情」が變革されない限り、この中國の停

滯態制は動かない。著者が、今日の中共政權の樹立をもつて、たゞちに經濟社會の面にはげしい變革が行はれると見る期待に對して、いぢるしく懷疑的であるのも、その故であり、新政權の革命の成否も、一にそこにかゝるとするものも、以上の如き著者の問題視角による(第五章)。

三

以上要に失したきらひがあるが、著者の述べんとするところに従つて、本書の内容を紹介して來た。何よりも先づ、本書の特色と貢獻とは、新資料的個別事實の提示にあるよりも、むしろ、今日與へられてゐる夥多な資料の示すところの複雑多様な中國經濟社會(主として辛亥革命以降)の様相をば、細心の配慮をもつて、すくれて統一的關聯において把握した點にある。従つて、問題はおのずから著者のもつとも苦心せられたであらうこの統一的把握の仕方について存し、本書の敘述についてのすべての個別的疑義は、皆この大きな問題と相關聯して來る。それ故、本書の理解の萬全を期するためには、先づそこから問ふことが、最も正しい問ひ方なのであらう。前述の如く、著者は、普遍的概念化の方法をさけて、「あるがまゝのものとして」の而も「一であつて他でない」中國經濟の「態制」を把握しようとする。そしてその際著者の強力主張することは、所謂發展段階概念の機械的適用を以てしては、それは把え得ないと云ふことである。それは正にその通りである。それを生んだ西歐

社會についてすら、その後の研究の發達の提示する新たな個別的事實を以て、段階概念の實在性を否定することは、恐らく易々たることであらう。然しながら、無限に多様な現實をば、それ／＼の問題視點にもとづいて、事實に即しつゝ而も何等かの統一的關聯において把握しようとする限り、「方法」~~問題~~は常に新な形で残る。段階概念も亦、その固有な問題視點による統一的現實把握の一つの試みであつたのである。恐らく、著者が段階概念を無用としたのは、それを支へる問題意識、そのいだけく世界體系とは、全く別個の天地を要望するが故なのであらう。然らば、著者は、どの様な問題視點から、又どの様な方法的用意をもつて、無限に多様な中國社會經濟の現實を把握したのであらうか。こゝに著者の所謂「態制」概念が、きはめて重要な意味をもつて、吟味されねばならない所以がある。前述の如く、著者は、中國經濟社會の固有な「態制」をば、それを構成する個々人の行動、それを裏付ける個々人の心情の社會的實現として理解する、すなはち、それは、個々人、すなはち中國人、と云ふ抽象的な主體的統一にかけて、政治、經濟、社會の多様な事實を、内面的に整理し、統合することによつて、類型的な西洋近代經濟社會を對極として予想しつゝ構成せられた一種の類型概念である。その限りにおいては、意識的或は無意識的に著者に影響を與へたであらう、先學の國民性を主體とする類型概念に近い。もしも、その様な評者の理解が正しいとするならば、著者の所謂「態制」は、何等かのより高次の問題視

書 評

野から、所與の經濟社會をさゝえる支柱的な契機と見なされるもの、を發見し整理するための手段であるべきであつて、もとより現實の「あるがまゝのもの」としてのそれではない。而もそれは、それを手段として用ふるその様な高次の問題視野の下にあつて、はじめてすぐれて客觀的な歴史概念として構成され得、又その機能をはたすものなのである。その様な嚴密な限定を附せない限り、本書における、殊には第三章以下の著者の解釋は、若干の異論に當面しなければならぬであらう。然るにも拘らず、著者は、その「態制」の具體的把握において、やゝ無限定のうらみがあり、それをさゝえる高次の問題視點、それ／＼の對象との距離が明確に意識されてゐない様に見える。著者は、その中國經濟社會の身をもつてする觀察、又は數多くの研究資料に即しての直觀的洞察によつて、その特質をば著者の内面においては、たしかにしつかりと觀得してゐるのである。著者の眼光は所與の現實の奥底にまで透徹しており、所謂借物の方法などによつては曇らざれてはゐない。この點は、何よりも先づ、中國研究者としての著者の何物にも代へ難い強味であり、本書が他の類書に比して卓越した價値を有する所以でもある。然しながら、問題は正に、この著者の内面に觀得された主觀的形態をば客觀化するその仕方について存するのである。中國社會の特異な停滞性の問題は、すでに早くから西歐の諸學者によつて、その固有な價値視角から、意識せられた問題であつた。例へば、或者は、生産力の發展と云ふ普遍的客觀的

な基準に問題視點をおくことによつて、對象からの距離を最も遠い點にとり、所謂「アジア的生產様式」の固有の運動法則を構造的に解明せんとした(ウィットフォード)。對象のもつ歴史の個性によりすぐれた感覺をもつ或者は、きはめて精密な典型概念の構成によつて、對象との距離をより近く而も明確に限定し、「宗教的經濟倫理」と云ふすぐれて根源的且普遍的な基準に問題視點をおくことによつて、中國經濟社會の特異な停滞的個性をば、之亦特殊としての西歐近代資本主義社會との世界的な高みにおけるコントラストにおいて、把握し概念化した(マックス・ウェーバー)。然るに、中國經濟社會の現實につきより豊富な知識をもち、あまりに身近にその特異性を感得する著者にあつては、明確に對象との距離をとり定めることがきはめて困難であるかの如くである。一方において著者は、その内面に感得した固有な形姿をば、概念化によつて損ふことを恐れ、他方では、而も尙、それをすぐれて統一的關聯において客觀化しようと努力する。この二つの逆にはたらく要求が、おそらく著者をもつとも苦しめ、而もそれが未だ適當な調和を得ないために、その「態制」把握に際して、對象との距離がしばしば浮動する結果をもたらした。「一であつて他」固有な態制把握をめざしつゝも、尙その客觀的個性把握に、時にはやゝ不明瞭なうらみを殘してゐること、具體的には著者の所謂「中國の心情」と、社會經濟的な諸制度諸事實との適合關係の

緊密度が尙不十分なうらみがあることは、そのことに起因するのではなからうか。その點をより明確にするためには、著者がすでにその内面において獲得してゐる固有な形姿が、果して何との對比において固有なのであるかが、先づ省みられねばならないのであらう。もとより、著者は、その考察において常にその對極として西歐近代社會を豫定してゐる。然しながら、著者の所謂「西歐近代社會」は、多くの約束の上に立つ精緻な概念構成の産物なのであつて、それとのコントラストにおいて、中國固有の「態制」を把握しようとするならば、その様な比較を行ふための共通の基準、共通の場がより高次の問題視野の下に選びさだめられねばならない。中國經濟社會の固有の「態制」の各領域におけるより明確な概念化による把握と、殊には著者の所謂「心情」のより精密に内容付けられた客觀的把握が、そこではじめて可能となるのではなからうか。

以上は、評者自身の關心のおもむくまゝに、しるした若干の覺書にすぎないのであつて、もとよりそれによつて、本書の價値は動くものではない。一切の安易を排して問題を正しい位置におこうとする本書の高い水準と、そのすぐれて統一的な内面把握による本書の新たな貢獻とは、自らそのことを證してゐるからである。中國研究の近來の力作と云ふべきであらう。(一九四九・一〇・八)(現代經濟學叢書之二四、昭和二十四年東洋經濟社刊、本文四百頁定價三百圓)